

竹雪

ワキ 直井何がし

狂言 直井後妻

子方 直井の子月若

狂言 直井従者

シテ 直井前妻

ヒメ 月若姉

地は 越後

季は 冬

「是は越後の国の住人。直井の何某と申す者にて候。

さても某妻を持ちて候ふを。かりそめながら離別して。あたり近き長松と申す所に置きて候。彼者二人の子を持ちて候。姉をば長松の母に添へ置き。弟月若をば。某一跡相続のために。此屋の内に置きて候。かやうに候ふ処に。又始めて妻をかたらひて候。此間宿願の事候ひて。いさゝか程遠き所に参籠仕り候ふ間。月若が事をくはしく申し置か

ばやと存じ候。如何に渡り候ふか。

「何事にて候ふぞ。

「さん候ふ唯今呼び出だし申す事余の儀にあらず。

某はさる宿願の子細候ひて。二三日の間物詣仕り候。其留守の内月若をよくく痛はりて賜はり候へ。又此国は雪深き所にて候。降り積り候へば四壁の竹の損じ候。殊に此程は何とやらん雪気になりて候ふ間。自然雪降り候はゞ。召し使ひ候ふ者

どもに仰せ付けられ候ひて。あたりの竹の雪を払はせられ候へ。

狂言女

「何と御物詣と候ふや。めでたうやがて御下向候へ。又竹の雪の事は心得申し候。又月若殿の事よく／＼痛はれと仰せられ候。あら今めかしや候。何方への御留守にてもよく痛はらぬ事の候ふか。

ワキ

「いや幼き者の事にて候ふ程にかやうに申し候。さらばやがて下向申さうずるにて候。

狂言女

「如何に月若。父御は物詣とて御出で候。御留守の間に月若をよく／＼痛はれと仰せ置かれて候。是は今めかしき事を仰せ候。いかさまおことは殿へ妾が悪くあたるなど、告口をして有るな。あらにくや／＼腹立や。

子

「実に世の中に月若程。果報なき者よもあらじ。あけくれ思ひを信濃なる秩父の山。秋はてぬれば柞の森の。頼む方なくなり果てぬ。たゞ長松におは

します。母と姉御に暇を乞ひ。何方へも行かばやと思ひ候。

シテサシ

「此程は松吹く風も淋しくて。伴なふ物は月の影。人も訪ひこぬ隠れがの。柴の扃のあけくれは。いつまで誰を長松の。緑子故の住居かな。

子詞

「如何に申し候。月若が参りて候。

シテ詞

「何月若と申すか。あらうれしと来りたるや。人数多連れて来りたるか。

子

「いやひとり参りて候。

シテ

「あら心もとなや。早日の暮れて有るに。何とてひとり来りたるぞ。

子

「さん候唯今参る事は継母御の。

シテ

「あゝ暫く。名のらずはいかゞそれとも夕暮の。面影変はる月若かな。あはれや実に我添ひたりし時は。さこそもてなしかしづきしに。梓弓やがていつしか引きかへて。身に着る衣は只鶉の。所々も

つゝかねば。何とも更にゆふしでの。肩にもかゝるべくもなし。花こそ綻びたるをば愛すれ。芭蕉葉こそ破れたるは風情あれ。

下歌地

「いづくに風のたまりつゝ。寒さを防ぎけるらん。

上歌

「短夜の。夢かや見れば驚くは。く。山田の鹿の如くなる。伏処荒れ立つ草むらに。尋ねて来たる志。親子ならではかく有らじ。く。

狂言女

「あら不思議や。月若が見え候はぬぞや。如何に誰

かある。

狂言男

「御前に候。

狂言女

「月若は何処へ行きてあるぞ。

狂言男

「更に存ぜず候。

狂言女

「いや／＼推量して候。先にちと言ひごとをしてあれば心にかけて。例の長松の母の方へ告口しに行きて有るな。あら憎や。只今父御の御歸り有つて召すと申して連れて来り候へ。

狂言男

「畏つて候。如何に申し候。殿の御帰り有つて月若殿と召され候。急いで御帰り候へ。」

シテ

「何父御の召され候ふとや。あら悲しやたま／＼来りたる物を。さりながら召しにて候はゞとく参りて。又此程に來りて母を慰め候へ。」

狂言男

「如何に申し候。月若殿を御供申して参りて候。」

狂言女

「如何に月若。さればこそ又長松に行きて告口して有るな。父の仰せ置かれて候。雪降らば四壁の竹

の雪を払はせよと仰せ候ふが。事の外雪降りて候

ふ程に。急いで竹の雪を払ひ候へ。物を脱ぎ小袖

一つにて払ひ候へ。」

子

「さりとは払はでかくて有るならば。」

地

「払はでかくて有るならば。我のみならず。母上も姉御前も。思ひは長松の風。身にしむばかり更くる夜の。雪さむうして払ひかね。帰らんとすれば門をさす。明けよとたゞけど音もせず。あら寒や

堪へがたや。月若たすけよ。実にや無常のあらき
風。憂き身ばかりつらきかなと。思ふかひなき月
若は。終に空しくなりにけり。く。

狂言男

「何と申すぞ。月若殿雪に埋もれて空しくなり給ひ
たると申すか。あら痛はしの御事や候。さこそ長
松に御座候ふ母御の御歎き候はんずらん。やがて
此由を長松に申し候ふべし。いかに申し候。月若
殿竹の雪に埋もれて空しく御なり候。

シテ、ヒメ

「実にく生を受くるたぐひ。誰か別れを悲しまざ
る。されば大聖釈尊も。羅睺為長子と説き。又
西方極樂の教主法蔵比丘は。御子の太子を悲しみ。
鹿野苑に迷はせ給ふところ承りて候へ。況んや人
間に於てをや。誰かは子を思はざる。

二人次第

「ふるに思ひの積る雪。く。消えし我子を尋ねん。

二人一声

「子を思ふ。身を白雪の振舞は。

ヒメ

「ふるにかへらぬ心かな。

シテ「花は根に鳥は古巢にかへれども。

ヒメ「我は再び此道に。

二人「帰らん事も片糸の。一筋にたゞ思ひきり。忘れて
年を降る雪の。積りの恨み深ければ。行く水に数
ならぬ。身は有明の月若が。たゞかきくれて。五
障の雲のひまよりも。あくがれ出づるはかなさよ。

シテ「うへなき思ひは富士の嶺の。

二人「かくれぬ雪ともあらはれなば。

地「恥かしや何処へやり。身は小車の我姿。

地「習はぬ業を菅簑は。く。寒風もたまらず。いつ
を呉山にあらねども。笠の雪の重さよ。老の白髪
となりやせん。戴く雪を払はん。先づ笠の雪を払
はん。

シテサシ「暁梁王の園に入らざれども。雪群山に満ち。

ヒメ「夜庾公が楼に登らねども。月千里に明らかなり。

二人「悲しや見渡せば。是は湘浦の浦かとよ。班に見ゆ

る雪の竹。涙や色を染むべき。

ヒメ 「彼唐の孟宗は。雪中に入り。親のため筍を設く。

シテ 「今我は又引きかへて。

地 「子の別路を悲しみて。竹の雪をかきのくる。我子の死骸あらば。孟宗にはかはりたり。うれしからずの雪の中や。思ひの多き年月も。はや呉竹の窓の雪。夜学の人の灯も。はらはゝやがて消えやせん。谷を隔つる山鳥の。尾を履む峰の竹には。虎

や住むらん恐ろしや。世を鶯の声立て。煙は竹を白雪の。あかしといへば須磨の浦の。海士の焼くなる塩やらん。

ロンギ地 「空に知られて木のもとに。吹きたてゝ降る雪は。

狼藉か落花か。

シテ 「母は泣くく雪をかけば。

ヒメ 「姉は父御を恨みて。人しれぬ涙せきあへず。

シテ 「すはや死骸の見えたるは。如何に月若母上よ。

ヒメ 「姉こそ我と。

地 「呼べども叫べども。答ふる声のなとなきぞ。消えよと思ふ雪は積りて。月若が。別れを何にたとへなん。く。

ワキ 詞 「此間諸願成就して。只今我屋に下向仕り候。あら不思議や。某が四壁の内に当つて人の泣声の聞え候。あら心もとなや候ふ。是は疑ふ所もなく。某が四壁の竹の中にて候ふは如何に。やがてすぐ

に立ち越え尋ねばやと存じ候。や。さればこそ如何に姫。是は何と申したる事ぞ。

ヒメ 詞 「さん候月若長松へ来り給ひしを。父の召しとて歸りて候へば。竹の雪を払へと仰せ候ふ程に払ひて候へば。もとより衣は一重なり。寒風に責められて空しくなりて候ふを。情ある人長松へ此由かくと申し候ふ程に。母上是まで御出でにて候。いづれも親にてましませども。母御は是ほど悲しみ給

ふに。父御前は子をば思ひ給はぬぞや。継母御をば恨むまじ。唯父御前こそ恨めしう候へ。

ワキ「や。言語道断の次第にて候ふ物かな。いや某は月若に竹の雪を払へと申したる事は。夢々なき事に候ふぞとよ。定めて人の教戒にてぞ候ふらん。是と申すもとにかくに。只某が科にてこそ候へ。あら面目なや候。

シテ「身を梁の燕のならひ。すみねたき事を聞きながら。

さまをも今までかへざるは。彼を思ふ故なるに。そも継母はいかなれば。此月若をば殺しけん。よその歎きは一旦の思ひ。唯憂き身ひとりの歎きぞかし。命惜しとも思はず。身は白雪と消えばやなん。理や面目なや。思はぬ外のなげきかな。

地「二人の親の悲しみの。く。不思議なるあはれみにや。虚空に声あつて。竹林の七賢。竹ゆゑ消ゆるみどり子を。又二度かへすなりと。告げ給ふ御

声より。月若いきかへり。喜びは日々に添ふ。

地

「かくて親子に合竹の。く。世を故郷をあらためて。仏法流布の寺となし。仏種の縁となりにけり。二世安楽の縁ふかき。親子の道ぞ有難き。く。」

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著